

平成29年度 子ども文教常任委員会 行政視察報告書

1 調査期間

平成29年10月23日（月）～10月25日（水）

2 視察都市及び視察事項

期 日	視察都市	視察事項
10月24日（火）	山形県酒田市	・ネウボラの取組について ・子育て世代包括支援センター「ぎゅっと」について
10月25日（水）	山形県東根市	・「まなびあテラス」について

*10月23日に秋田県横手市を訪問して「学力向上の推進について」を視察予定だったが、台風21号のため午後より出発して秋田泊、24日よりの視察に変更した。

3 視察者

東木 久代（委員長）	北橋 節男（副委員長）
山内 幹郎	桜井 直人
宮戸 光	竹村 雅夫
平川 和美	渡辺 光雄
神村 健太郎	

4 視察事項の概要

（1）山形県酒田市

①人口及び面積 人口105,045人 面積602.79k㎡

②平成29年度一般会計予算 524億8千万円

③視察事項の事業概要

a) 酒田市の状況について

鳥海山を背に、江戸時代から大坂への日本海航路（北前船）の要所として栄えた酒田市は、山形県唯一の重要港湾であり、現在は大型客船も入港している。新米（つや姫）を含め、収穫の秋を迎えている。新庁舎が本年7月に完成したばかりであり、正に市議会議員選挙の真っ最中に、視察を受け入れていただいた。

市町村合併により、東京23区と同じ広さで人口は10万5千人。年間に生まれる子どもは700人弱で、高齢化は34%である。また、山形県は三世帯同居率が日本一だが、その一方で母親の孤立感もしばし見られるので、支援が必要な

現状である。

b) 酒田市子育て世代包括支援センター「ぎゅっと」の概要

① 子育て世代包括支援センターについて

平成29年4月に母子保健法を改正して子育て世代包括支援センターを法定化した。保健師等を配置して、母子保健サービスと子育て支援サービスを一体的提供できるよう、きめ細かな相談支援等を行う。実施市町村は、平成28年4月で296市町村720か所になり、平成32年末までに全国展開を目指している。

「ネウボラ」とはフィンランド語で「助言、アドバイスの場」であり、出産・子育て支援のための地域拠点・制度のこと。妊娠初期から女性全員と専門職との個別・対面で対話し、妊婦全員に丁寧に寄り添う。妊娠から就学前までの子育てについて、疑問や不安に答えサポートしてくれる専門職がいる「ワンストップ」の場所。

山形県では平成27年度3市町、28年度11市町、29年度21市町と増え、「ぎゅっと」は29年6月にオープンしたばかりで、次第に利用者も増え始めた。専門の部屋を設け、地区担当の保健師と連携して母子を支援。母子保健コーディネーター4名（保健師2、助産師1、看護師1）の専任者を配置している。

今後マネジメントが必須事業であり、支援プラン作成などワンストップサービスのできるところから展開するとのこと。

② 酒田市の妊婦の状況について

母子健康手帳の交付は毎年600人台だが、10代で1%。20代前半が一ケタで減っているが、20代後半からは30%以上で安定しており、30代後半から40代前半の妊婦は増えている。

妊婦の喫煙状況は10%台で、一時やめても再喫煙者が多い。夫の喫煙状況は40%台で、受動喫煙防止の協力は必要。妊婦の飲酒状況は半数が妊娠してやめているが、妊娠前から働きかけることが必要である。

妊娠時の未入籍は10%で、その内入籍予定なしは2%。要対協の虐待ケースは0.8%あり、妊婦の精神疾患既往歴が0.8%から2.4%と増えた。妊娠届け出時の心配事は4割以上あり、出産・育児のこと、仕事のこと、経済的なこと、健康状態、家族との関係、となっている。

ハイリスク家庭の内訳は、40歳以上、第4子以上、精神疾患、喫煙飲酒、シングルマザー等、支援が必要である。また、ステップファミリー(再婚)、子どもがかわいいと思わない等、細やかな対応に心掛けているとのこと。

③ 「ぎゅっと」の事業について

新生児訪問は99.6%に実施している。長期の里帰り出産でも28日以内に電話連絡し、里帰り自治体に訪問依頼することもある。できるだけ早期に産婦と連絡を取り状況把握して出産後の支援につなげることは、保健師全員の共通認識となっている。

乳幼児健診は99%以上。保育園幼稚園訪問と育ちのサポート事業（発達障がい支援）の相談数は969件（4歳未満が537件）で、幼児発達フォロー教室は保護者と一緒に小集団の遊びから学ぶもので、31回実施した。

「ぎゅっと」は妊娠から出産・子育て期の総合相談窓口で、母子健康手帳交付や支援プランの策定など、来所・電話の実績が805件の相談に増えている。相談の中には「出産後なかなか外に出られず不安だった」「家族関係など生活面も含めてゆったり相談できた」など、他機関との連携に繋げることが大事となってくる。

「ぎゅっと」には「子どもをぎゅっと抱きしめて、地域で子育て家庭をぎゅっと応援」の想いを込めた。

- 実施事業は
- 1 ぎゅっとサロン
 - 2 マタニティ教室
 - 3 産後の骨盤ケア教室
 - 4 さかたすくすくベビーギフト
 - 5 産後ケア事業（宿泊型）
 - 6 産前産後サポート事業（訪問型）
 - 7 母乳ミルク相談室

開設時間は、月～金で8時30分～17時15分だが、7月から第2・4土曜も8時30分～12時30分に開設して平日お勤めの方にはお勧めしている。

c) 藤沢市の課題と比較しての考察

「ネウボラ」とは、フィンランドで行われている母子とその家庭を継続的に支援する仕組みです。藤沢市でも、妊娠・出産・育児への切れ目ない支援を目指して、藤沢版ネウボラがあります。南・北保健センターに常駐している地区担当保健師（母子保健コーディネーター）が、妊娠や出産・育児に関する相談に応じるほか、関係機関と連携して必要な支援を提供できるよう調整しています。

周知方法は、酒田市・藤沢市ともに重要です。酒田市は母子手帳の交付時又は各医療機関でチラシをまいているが、藤沢市ではさらに電話相談とホームページ上で問答形式など載せている。また、父親のかかわりは重要で、相談時に父親が

同席する酒田市は、カラー版40ページの小冊子「父親手帳」を発行しており、大いに参考になると思う。

ステップファミリーやシングルマザーなどをケース会議で把握しており、必要に応じて他機関に繋げている。知的障害などのケースも連携会議で情報共有している。ダブルケアのケースも、藤沢市同様に地域包括ケアへ繋げることができている。経済面でも減免措置で、非課税世帯は半額になる。

「さかたすくすくベビーギフト」は母子健康手帳交付時に贈呈され、山形県より二分の一補助が出ている。妊産婦のケア会議は対象者全員について実施していて、きめ細かいケアは藤沢市に反映するよう働き掛けていきたいと感じた。

藤沢市は、六会・辻堂の子育て支援センターが地域版マタニティクラスを実施しており、ファミリーサポートセンターも事前登録制ながら一時的な預かりなど行っているが、ホームページの子育てネットふじさわにも、この成果をさらなる充実に繋げていきたい。



(2) 山形県東根市

①人口及び面積 人口47,476人 面積206,94km²

②平成29年度一般会計予算 205億2千万円

③視察事項の事業概要

a) 藤沢市の課題

公共施設の複合化が藤沢市の必須課題で、南市民図書館や藤沢市民会館大ホール・小ホール、第1展示・第2展示ホール、市民ギャラリーなど、文化ゾーンとしてビジョン策定が急がれる。図書館を核とする複合型先進施設を、自治体の規模や立地条件を多角的に研究・調査する必要があると感じている。現在、まちづくりの視点から、学びと交流の場・居場所づくりで注目されている山形県東根市は、まさに旬の自治体との評価が高く、藤沢市にはない美術館も併設した完成直後の「まなびあテラス」を視察することとした。

b) 東根市「まなびあテラス」の概要

山形県東根市は、工業生産が米沢に次いで県内第2位。農業では果樹王国と呼ばれ、サクランボは「佐藤錦」発祥の地で生産日本一。東根産米の「つや姫」。大ケヤキやさくらんぼマラソン大会等で観光客誘致も盛ん。「さくらんぼ東根駅」は新幹線停車駅としては初の果物名を冠したJR駅名。子育て支援センター・ファミリーサポートセンター設置、医療費無料化や第3子以降の保育料無料、中高一貫校の開校など、手厚い子育て支援策を展開している。

東根市公益文化施設「まなびあテラス」は教育委員会生涯学習課が所管している。昨年11月3日にオープン。市民が集い・学び・憩い・交流する場、市民を照らす学びのテラス、がネーミングに込められている。図書館・美術館・市民活動支援センターの機能を併せ持ち、市民憲章に掲げる「香り高い文化のまち」形成のため、地域のコミュニティの核となり、誰もが気軽に立ち寄れる親しみと温もりのある施設を目指している。

以前は駅近くに図書館があったが蔵書も少なく、市に美術館もなかった。現在1周年記念事業として、地元出身の佐藤忠良展を開催中。朝霞市の丸沼芸術の森より貸し出ししていただき、無料で公開している。絵本「大きなかぶ」をイラスト。この1年で来館者は30万人に上る見込み。

図書館蔵書は20万冊。美術館・カフェ・都市公園を併設。PFI事業で民間のノウハウを生かした低コストで質の高い事業だが、メリットとデメリットもある。株式会社メディアゲートひがしねが運営。

隣接した緑豊かな都市公園と、図書館・美術館が一体化した交流の場。ガラス張りのエントランスには、地域映像アーカイブシステムで約60

コンテンツが整備されている。

図書館の特徴

- ① おしゃべりOKのカフェを併設
- ② 自動貸出機・児童返却機
- ③ ティーンズコーナーの充実・学習室（40＋10席）
- ④ 児童コーナー（おしゃべりOK）・おはなしの部屋
- ⑤ 24時間受取り可能な貸出ボックス・読書手帳の設置
- ⑥ 東北初のIC予約本受け取り棚・電子書籍（約4000タイトル）

美術館の特徴

- ① 市民作品から一流芸術作家まで幅広く展示
- ② 市民ギャラリー（4分割）と特別展示室（自主企画の展覧会）
- ③ ファインアートから現代アートまで対応
- ④ 創作活動のアトリエ提供。電気窯・電気工作機器を配備
- ⑤ ワークショップ開催、市民参加型のアートプロジェクト

市民活動支援センター

- ① 情報ステーション（HPによる情報発信）
- ② 情報ラウンジ（情報掲示板・交流コーナー）
- ③ プリント工房（印刷機・紙折り機・製本機）
- ④ 講座室（各種講座・研修会の開催）

運営の特徴

- ① サポーターズクラブの設立（運営への市民参加）
ジュニア・ティーンズ・一般など約50名が登録
- ② メディア・アートショップ
独立採算制・イベント関連本やオリジナルグッズを販売

c) 藤沢市の課題と比較しての考察

「まなびあテラス」は東根市内の芸術文化関係者・団体など、市民からの声が大きかったことと、風格のあるまちづくりを目指す市長の方針が一致した。隣接の中高一貫校と通路でつながり、学校との連携も進めている。

人生100年時代での役割は、子どもから高齢者まで自由な施設を目指して、「～してはダメ」の張り紙など禁止事項はやめる。図書館は誰でも使えるべきもので、利用者の1/3は市外の方。多世代交流などがこれからの課題である。

貸出カードも記録を印刷できるプリペイドカード式を採用し、市民対象の藤沢市とは違うタイプ。読書手帳は希望者に出しているが、印字ではなくシール式。

企画は学芸員3名。責任者はそれぞれ資格を持つ。職員10名のうち司書が6

名で、芸術監督は筑波大・東北芸術大教授に依頼。アーカイブスはNHKも協力している。

「市民を交えた企画運営」は、図書館運営協議会、美術館運営協議会、学校関係者、市民などで構成され、年2回ほど開催する。視察時には、エントランスでJAXAより貸し出された日本人宇宙飛行士の宇宙服やハヤブサの模型が展示されていた。

都市公園では家族連れが多く、多少の切り傷など当たり前と考える。エントランスでは飲食OK。本格的イタリアレストランの様な「カフェ」があり、夕方からはアルコールも出している。

静かな場所と多少の騒音を許容する場所を分ける。学習室は静かな場所だが、児童コーナーは離れた場所で影響しあわないよう配慮をしている。

東根市の施設設置における特筆すべき点としては、市長の強い意向があり、市民の声とも一致して特に反対が出なかったこと。運営も市民が参加する企画会議を重ねていること。人口は増加中で山形では6番目、1番の伸び率であり、学校もさらに建設の予定があること。「子育てするなら東根市」の状況を生んでいるのが、この図書館・美術館・市民活動支援センターが融合した「まなびあテラス」の情報発信によるものだという事である。

市民会館・南図書館・市民ギャラリーなどの文化ゾーンの再構築を考える藤沢市には、市民に支持された「まなびあテラス」は、大いに参考になる要素が詰まった事業であると感じて、帰りの途に就いた。

